

中毒発生時の状況や防止策などの詳細情報

1. 人に対する事故及び被害の発生状況

原因	発生月	使用現場の区分 ^{※1}	中毒の内容		被害者情報		中毒発生時の状況	一般的な防止策
			症状	中毒の程度	年齢	被害者数		
マスク、メガネ、服装等装備不十分	H27年5月	その他	眼の痛み	不明	40～59歳	1	散布時に装備が不十分だったため暴露した。	・農薬の調製又は散布を行うときは、農薬用マスク、保護メガネ等の防護装備を着用する。 ・作業後は身体についた汚れを洗い流し、洗眼・うがいをするとともに衣服を交換する。
	H27年9月	農業	気分不調、動悸	軽症	80歳～	1		
	H28年3月	農業	喉の痛み	不明	20～39歳	1		
	H28年3月	農業	眼のかすみ	軽症	20～39歳	1	散布中に誤って眼に入った。	
使用時に注意を怠ったため本人が暴露	H27年11月	農業	口唇のしびれ	軽症	60～79歳	1	故障した噴霧器のノズルを直すために口にくわえた。	・農薬が付着した散布器具に直接触れない。 ・農薬散布器具が故障した場合には、説明書を参照する、取扱店に相談する等適切な処置を行う。
	H27年11月	その他	不明 意識消失、呼吸障害	死亡 重症	60～79歳 20～39歳	1 1	強アルカリ性の農薬に酸性肥料を混合して散布した後のタンク清掃中に、発生した有毒ガスを吸入した。	・農薬のラベルに、他の農薬等との混用に関する注意事項が表示されている場合は、それを遵守する。
散布農薬の飛散によるもの	H27年4月	農業	眼の痛み、喉の痛み	不明	0～19歳	6	登校時間帯に散布された農薬が飛散し、畑に隣接する通学路を歩いていた児童や保護者が暴露した。	・住宅地等の周辺では耕種的防除や物理的防除など農薬以外の防除手法を検討する。 ・飛散が少ないと考えられる剤型を選択したり、飛散低減ノズルを使用するなど、飛散防止対策を十分に行う。 ・農薬が飛散しないよう風向等に注意し、強風時の散布は控える。 ・住宅地等の周辺で農薬を使用する際は、周辺住民に事前に周知する。 ・児童等の通学時間帯の散布は避ける。
				不明	成人	1		
農薬使用後の作業管理不良	H27年5月	農業	眼の痛み	不明 ^{※2}	20～39歳	1	土壌くん蒸剤（クロルピクリン；劇物）の使用時に被覆を行わなかったため、農薬が揮発して近隣住民が体調不良を訴えた。	・住宅、畜舎等が風下になる場合には、土壌くん蒸剤の使用を控える。 ・住宅地等の周辺では高温期の処理を避ける。 ・土壌くん蒸剤を使用した際は被覆を完全に行う。 ・適正な厚さの被覆資材を用いる。 ・特に、土壌くん蒸剤の使用前には、改めてラベルの記載事項を確認し、記載事項を遵守する。
			眼の痛み	不明 ^{※2}	40～59歳	1		
	H27年8月	農業	眼の痛み	不明 ^{※2}	0～19歳	1		
			眼の痛み	不明 ^{※2}	60～79歳	1		

1. 人に対する事故及び被害の発生状況

原因	発生月	使用現場の区分※1	中毒の内容		被害者情報		中毒発生時の状況	一般的な防止策
			症状	中毒の程度	年齢	被害者数		
農薬使用後の作業管理不良	H28年1月	農業	頭痛、眼の痛み、鼻への刺激、喉の痛み	中軽症	0～19歳	2	土壌くん蒸剤(クロルピクリン;劇物)の使用時に被覆を行わなかったため、農薬が揮発して近隣住民が体調不良を訴えた。	・住宅、畜舎等が風下になる場合には、土壌くん蒸剤の使用を控える。 ・住宅地等の周辺では高温期の処理を避ける。 ・土壌くん蒸剤を使用した際は被覆を完全に行う。 ・適正な厚さの被覆資材を用いる。 ・特に、土壌くん蒸剤の使用前には、改めてラベルの記載事項を確認し、記載事項を遵守する。
				中軽症	20～39歳	1		
				中軽症	60～79歳	3		
			頭痛、眼の痛み、鼻への刺激	不明※2	20～39歳	4		
				不明※2	60～79歳	1		
			頭痛、眼の痛み、喉の痛み	不明※2	40～59歳	2		
			眼の痛み	不明※2	不明	3		
保管管理不良、容器の移し替え等による誤飲誤食	H27年6月	その他	胃のむかつき、口腔内の違和感	軽症	60～79歳	1	農薬がペットボトルに移し替えられていたため、飲料と間違えて誤飲した。	・農薬やその希釈液、残渣等をペットボトルやガラス瓶などの飲料品の空容器等に移し替えない。 ・農薬やその希釈液、残渣等を飲料品の空容器等に誤って移し替えてしまうことのないよう、これらの空容器等は保管庫の近くに置かない。 ・農薬は、飲食物と分けて保管する。 ・農薬は、居住空間のテーブル等に放置しない。 ・農薬は、農薬保管庫の中に施錠して保管する等、安全な場所に保管する。
	H27年12月	その他	なし	軽症	40～59歳	1	農薬の希釈液をペットボトルに入れて保管していたため、水と間違えて誤飲した。	
	H27年8月	農業	嘔吐	死亡	80歳～	1	防除作業に用いるためほ場に持って行った農薬をお茶と間違えて誤飲した。	
	H27年10月	その他	なし	軽症	0～19歳	1	タッパーに入れられ、台所に放置されていた粒状の農薬を、幼児が誤って口に入れた。	
	H27年6月	その他	呼吸困難、顔面蒼白、発汗	重症	80歳～	1	栄養ドリンクと間違えて誤飲した。	
	H27年6月	その他	酩酊	軽症	40～59歳	1	泥酔し、飲料と間違えて誤飲した。	
	H27年5月	その他	発汗、唾液分泌	重症	80歳～	1	飲料と間違えて誤飲した。	

1. 人に対する事故及び被害の発生状況

原因	発生月	使用現場の区分※1	中毒の内容		被害者情報		中毒発生時の状況	一般的な防止策
			症状	中毒の程度	年齢	被害者数		
保管管理不良、容器の移し替え等による誤飲誤食	H27年12月	その他	気分不良、吐き気、めまい、腹痛	軽症	40～59歳	1	農薬の希釈液が入れられたペットボトルが、屋外の調理場付近に置かれていたため、誤って調理に使用してしまい、その料理を食べた。	・農薬やその希釈液、残渣等をペットボトルやガラス瓶などの飲料品の空容器等に移し替えない。 ・農薬やその希釈液、残渣等を飲料品の空容器等に誤って移し替えてしまうことのないよう、これらの空容器等は保管庫の近くに置かない。 ・農薬は、居住空間のテーブル等に放置しない。 ・農薬は、飲食物と分けて保管する。 ・農薬は、農薬保管庫の中に施錠して保管する等、安全な場所に保管する。
	H27年7月	その他	意識障害	重傷	80歳～	1	認知症の方が、テーブルにおいてあった農薬を飲料と間違えて誤飲した。	
	H27年4月	その他	不明	死亡	80歳～	1	認知症の方が飲料と間違えて誤飲した。	
	H27年9月	その他	不明	死亡	80歳～	1	認知症の方が飲料と間違えて誤飲した。	
薬液運搬中の容器破損、転倒等	H27年10月	その他	眼の痛み	不明※2	不明	3	運送業者の施設において、作業員が農薬の入った容器をフォークリフトで移動する際、誤って先端部分で缶を破損し、農薬が流出し、揮発した農薬に作業員が暴露した。	・農薬の輸送を委託する際は農薬の性状や毒性、取扱い上の注意事項、事故時の対応方法などの情報を提供する。 ・農薬を輸送する際は農薬の性状や毒性、取扱い上の注意事項、事故時の対応方法などの情報を入手するよう努める。 ・移送時の取扱いは注意事項などを守り注意して行うこと。 ・農薬を取り扱うときは、農薬用マスク、保護メガネ等防護装備を着用する。
その他	H27年12月	その他	眼の痛み、喉の痛み	中軽症	不明	12	ごみ処理施設に農薬の除去が不十分であった缶が廃棄されたため、処理施設の作業員が、揮発した缶に残っていた農薬に暴露し、体調不良を訴えた。	・使用残農薬や不要になった農薬は廃棄物処理業者に処理を依頼するなど適正に処理する。 ・農薬が入った容器を処理する際には、農薬が容器内に残っている旨を廃棄物処理業者に伝える。 ・土壌くん蒸剤の空容器を処理する際は、残液及び残臭を適切に処理した後に、廃棄物処理業者に廃棄を依頼する。
原因不明	H27年5月	農業	全身の発疹を伴う痒み	軽症	80歳～	1	農薬の皮膚接触による中毒症状と考えられる。	・農薬の調製又は散布を行うときは、農薬用マスク、保護メガネ等の防護装備を着用する。 ・作業後は身体についた汚れを洗い流し、洗眼・うがいをするともに衣服を交換する。
	H27年7月	農業	眼内部の薬物熱傷、皮膚への薬物刺激	不明	20～39歳	1	農薬の眼及び皮膚接触による中毒症状と考えられる。	

1. 人に対する事故及び被害の発生状況

原因	発生月	使用現場の区分※1	中毒の内容		被害者情報		中毒発生時の状況	一般的な防止策
			症状	中毒の程度	年齢	被害者数		
原因不明	H27年11月	その他	不明	死亡	60～79歳	1	農薬の服用による中毒症状と考えられる。	・農薬やその希釈液、残渣等をペットボトルやガラス瓶などの飲料品の空容器等に移し替えない。 ・農薬やその希釈液、残渣等を飲料品の空容器等に誤って移し替えてしまうことのないよう、これらの空容器等は保管庫の近くに置かない。 ・農薬は、飲食物と分けて保管する。 ・農薬は、農薬保管庫の中に施錠して保管する等、安全な場所に保管する。
	H27年12月	その他	不明	死亡	60～79歳	1	農薬の服用による中毒症状と考えられる。	
	H28年3月	その他	不明	死亡	60～79歳	1	農薬の服用による中毒症状と考えられる。	

※1 使用現場の区分とは、農業現場での使用を「農業」、それ以外を「その他」としています。

※2 医療機関を受診していないため、中毒の程度を「不明」としています。

2. 農作物、家畜等に対する被害

被害対象	発生月	被害状況	被害発生時の状況	一般的な防止策
農作物	H27年7月	稲の葉及び穂の枯死	近隣の排水路で、飛散防止対策を実施せずに除草剤を散布したため、飛散した。	・飛散が少ないと考えられる剤型を選択したり、飛散低減ノズルを使用するなど、飛散防止対策を十分に行う。 ・農薬が飛散しないよう風向等に注意し、強風時の散布は控える。
	H27年9月	レタスの葉の黄変	強風時に、隣接する土地で、飛散防止対策を実施せずに除草剤を散布したため、飛散した。	
	H27年4月	カーネーションの葉の褐変	土壌くん蒸剤（クロロピクリン；劇物）の使用時に被覆を行ったが、使用した資材が薄かったため、揮発した農薬が透過し、ほ場より低地にあるハウス内に流入した。	・土壌くん蒸剤を使用した際は、適正な厚さの資材を用いて、被覆を完全に行う。
	H27年11月	きゅうりの生育阻害	除草剤を希釈した容器を洗浄せずに、同じ容器で殺虫剤を希釈して散布した。	・農薬の使用後には散布器具を十分に洗浄する。 ・農薬の使用前後には散布器具等を点検し、十分に洗浄されているか確認する。 ・殺虫剤や殺菌剤の散布器具等と除草剤の散布器具等は別のものを使用する。
	H27年6月	ししとうの枯死	除草剤を散布した散布器具の洗浄が不十分なまま、同じ散布器具を用いて殺虫剤を散布した。	
	H27年6月	稲の枯死	除草剤を稲の育苗箱に使用できる殺虫殺菌剤と誤認し、育苗箱に散布した。	・農薬の使用に当たっては、容器の表示事項をよく読み、適正に使用する。
	H27年6月	稲の枯死		
	H27年6月	稲の枯死		
	H27年6月	稲の枯死		
魚類	H27年9月	魚類の斃死	河川水及び斃死魚から農薬の成分が検出されていたが、その原因や流入経路は特定できなかった。	・農薬が河川に飛散・流入しないように注意する。 ・使用残農薬や不要になった農薬は、廃棄物処理業者に処理を依頼するなど適正に処理する。
	H27年12月	魚類の斃死	因果関係は不明であるが、農薬の希釈液を河川に廃棄した農業者がおり、農薬が原因の一つと考えられる。	
	H27年10月	魚類の斃死	河川水及び斃死魚から農薬の成分が検出されていたが、その原因や流入経路は特定できなかった。	